

レポーター：学芸員の杉山さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：とってもきれいなお着物ですね。

学芸員：はい、そうですね、着物に見えるんですけども、実は能というですね日本を代表する伝統芸能の衣装なんですね。で、こちらのほうは、それにつかわれる、仮面、能面ですね。今、見て頂いているものは全部江戸時代のものなんですけれども、能は今でも盛んで、福岡でもたくさんの上演されて見る機会が多いんですけども、もっと盛んだったのは江戸時代なんですね。で、江戸時代というのは、それはすごく好きな人だけが見るというものではなくって、武家社会の中で、おもてなしの時とか、お祝いごとのときとか必ず上演されるものだったので、どこの名家でも、衣装、装束とか能面はすごくたくさん数を持っていました。大名の黒田家でも相応の52万石にふさわしい能装束や能面を所蔵していたはずなんですけれども、明治以降に分散してわからなくなった。だけど、能面と能装束というのはやはり、日本の江戸時代の文化を代表するそういう側面もあるので、当館では本当の能装束を用意しまして、皆様に、定期的に見て頂く機会をつくっていきます。特に、この織物はですね、福岡の博多織という伝統織物の産地でもありますので、織が作るですね、日本の精神と美しさっていうものを感じてもらいたいと思っていつも展示しています。

レポーター：能面にもそれぞれあるんですか。

学芸員：そうですね、能面はですね、みなさんが想像する能面で思いうかべるのは、小面という若い女性をかたどっているもの、あるいは、角の生えた般若のお面ですね、よく思い浮かべると思うんですけど、実際にもものすごくたくさんの種類があって、男性もあるしおじいさんとかですね、あるいは人ではない竜神とか雷さまとか、そういうものも全部能面になってるんですね。

レポーター：へえ～。

学芸員：はい。こちらの能面はですね、十寸髪という若い女性のお面ですね。少し、額のところにえくぼがあるところがあって、少し顔をしかめたような、ちょっと緊張感のある表情で、あるいは巴御前とって、非常に強かった女武者が主人公の物語に使われているものなんです。

レポーター：こちらが男性の能面ですか。

学芸員：そうですね。男性の中でも年老いたおじいさんの面というのも、非常にたくさん能面には作られています。ちょっとずつシワの形とかですね、ひげの作り方が違うおじいさんがすごくたくさんの種類がありますね。それは、年をとったおじいさんというのが、いろいろな形で必要な役割を果たすんですね。神様の化身とか、亡霊の化身として、一番最初に見る人の前に現れたりすることが多いですね。昔の日本人のですね、年を取

った人を非常に神様に近い存在だと考えていたことの表れなのかなというふうに、おじいさんの面を見ていると思いますね。

レポーター：能面から日本人の心みたいなものが一緒に感じることができるんですね。

学芸員：そうですね、本当に能が大成したというのは室町時代だといわれていますけど、その頃の精神世界の深さというようなものをたくさんの能面を見ていると少し触れることができるのかなと思っています。